2016年12月18日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「ゼカリア書：全地の神殿エルサレム」**

聖書箇所：ゼカリヤ書1:1-6、9:9-10

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はゼカリヤ書からです。2箇所読んでいただきました。ゼカリヤ書は複数の人物によって書かれたのではないか、と言われている文書ですが、それぞれ第一ゼカリヤ、第二ゼカリヤ、第三ゼカリヤの記述と言われていますがその第一と第二のところから一か所づつとりあげました。この2箇所に重点をおきながらも、ゼカリヤ書全体を見ながらお話しをいたします。

　例によって、時代背景をご説明いたします。時期的にはゼカリヤ書の直前のハガイ書とほぼ重なっています。ハガイ書がBC520年頃と推測されるのに対し、ゼカリヤ書はBC519年以降と推察されています。そのころの時代背景を簡単に復習致します。出発点はバビロン捕囚です。BC587年に南王国ユダが新バビロニア帝国によって滅ぼされます。その前後3回にわたってユダ王国の指導者たちはバビロニアの首都バビロンにつれて行かれました。これをバビロン捕囚と言います。その後BC539年、バビロニアはペルシャによって滅ぼされます。ペルシャは宗教的には寛容策をとり、キュロス王はユダヤ人に対し、エルサレムへの帰還許可を与えます。これに答え、一部のユダヤ人はエルサレムに戻り、神殿再建にとりかかりましたが、反対にあいこの事業はとん挫します。しかしBC520年頃、神殿工事再開の機運が高まり、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアの指導の下でBC515年遂に完成いたしました。ハガイ、ゼカリヤ両預言者はこの工事を励ました人々でした。第一ゼカリヤ書は神殿再建工事完了直前にまとめられたもの、と思われます。第二、第三ザカリヤについては諸説あります。BC2cのシリア支配の時代と言う説もありますが、不明です。

これとの関連で著作年代を推定するにあたって、事後預言か将来預言なのか、という聖書解釈上の根本問題があります。それは、エゼキエル書、ダニエル書、ザカリヤ書等黙示文書といわれる預言書の解釈に当たって、歴史的発生事実が発生して後にこれを想定し預言していると考えるのか、将来の出来事を神様が事前に知らせている、と考えるか、です。現代批評学の学者は基本的には事後預言だとして著作年代をその歴史的事実が発生したのち、と解釈します。これに対し聖書主義の学者たちは神様が事前に将来発生することについてあらかじめ伝えているのだ、という立場をとります。このため著作年代はその文書に描かれている時代から遠くない時期と考えます。私は事後預言としか解釈できない程に歴史的事実の描写があれば事後預言と解釈しますが、原則としては福音派（聖書主義）の解釈に賛成です。できる限り聖書の言葉を文字通りに理解すべきである、との考えからです。その意味で、第二、第三ゼカリヤの記述も、どうしてもその後の歴史的事実を踏まえなければ預言できない、というものではありません。従って、第一ゼカリヤ書からそれほど遠くない時期、と考えます。但し、同一人物とは考えにくいです。ダニエル書の場合、ダニエル書を保存し追加記述をしていた集団が存在した、と考えられていますがゼカリヤ書においても同様なことが考えられます。黙示文書を叙述し続けていた集団が存在した、と考えるのです。

神殿はなんとか完成したのですが、老人はソロモンの神殿の方がずっと素晴らしい、と言って再建神殿をばかにした、と言われています。この再建神殿は第二神殿とよばれ、ヘロデ大王の増築を経て、AD70年のローマによるエルサレム破滅時に壊滅します。「嘆きの壁」と言われているのはこの第二神殿の城壁の一部です。ゼカリヤという名前は「za:kar」という「思い出す、記憶する」という単語の変化形と「ya:」という「ya:ve」「神、主」という単語の組み合わせであり、「主が彼に目をとめた」という意味となります。旧約聖書にはこの名前が多数現れます。

1:1に「イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤ」とありますが、エズラ記5:1では「イドの子ゼカリヤ」となっています。おそらくイド、ベレクヤ、ゼカリヤの順なのでしょうがエズラ記では一代省略して「子」と言っているのだと思われます。旧約では子、孫、曾孫などが厳密には区別されていません。ハガイと同時期の預言者ですが、おそらくゼカリヤはハガイの後輩といったところではないか、と想像されます。

2節に主はゼカリヤの先祖たちを激しく怒られた、とあります。この部分はヘブル語では「怒りを怒る」と書かれており「qa:tsaf」という「怒る」という言葉の強調となっています。そのため新改訳では「激しく怒られた」と訳されています。神殿再建が順調にいかず中断されたことが背景にある、と思われます。ゼカリヤ達はバビロンから帰還した人々ですが、エルサレムの地に残った者達はハガイ達の神殿再建の声に応じず非協力的態度をとったことを指して、主なる神の怒りが爆発した、というのです。3節がポイントです。「あなたは、彼らに言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしに帰れ。－－万軍の主の御告げ－－そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の主は仰せられる」と言います。「わたしに帰れ」の「帰れ」はヘブル語の「shu:b」であり。新約の用語では「悔い改めよ」に該当します。神の恵みから遠ざかり自分の力により頼んで居ることをやめ、神の元に帰れ、と言われています。もし、こうなれば神様も人々の元に帰って来る、といわれています。前者の人が神に立ち帰るのは「shu:b」の通常の使い方ですが、神が人に立ち帰る、という言い方は例外的です。イスラエルの神は人が立ち帰るのに対し応答される神である、ということを強調するためと思われます。神様の方からいらっしゃるというのは神の恵みの現れです。福音書における放蕩息子の話のなかで最後の場面で「父親は---走り寄って彼を抱き」とあります。同じ意味と考えられます。4節に「悪の道から立ち帰り、---悪いわざを悔い改めよ」と出てきますが、この「立ち返り」と「悔い改めよ」は原文では同一の単語であり、「shu:b」です。実はこの言葉がゼカリヤ書だけでなんと17回も使われています。1:6の「立ち返って」、1:16の主がエルサレムに「帰る」、4:1の御使いが「戻ってきて」などなどです。1:1-6の部分は「悔い改めの勧告」と称せられている箇所ですので「shu:b」が多く出てくるのは解るのですがこの言葉がゼカリヤ書全体に使用されている、ということはこれからのゼカリヤの預言においても我々に悔い改めを迫る神の意志が存在する、と考えるべきでしょう。私たちは主なる神に立ち帰り、自分の中に祈りの神殿を築かねばならないのだと思います。

5節の「預言者たちは永遠に生きているだろうか」というところはいろんな解釈があるようですが“預言者も生きて我々に勧告するまではできないのだ”という逆説的に解釈することができます。ゼカリヤ書は各種預言書の最後の方ですが、ここで預言者として念頭に在るのはエレミヤであろうと想像できます。エレミヤ書と類似の表現が多数みられるからです。そのエレミヤももういない。ゼカリヤの先祖たちはエレミヤの声を忘れ、主なる神以外の力を信ずるようになっていった、ということです。6節では預言者のことばとおきてがゼカリヤの先祖たち即ちユダの人々にせまっていたのに、これを聞かなかった。それで彼らははったと気づき「万軍の主は、私たちの行いとわざに応じて、私たちにしようと考えられたとおりを、私たちにされた」と告白しています。これ以下で幻の記述が始まりますが、ゼカリヤ書は冒頭で、“これからのべる幻を考える中で、主なる神が、あなた達が悔い改め神の義に立ち帰ることを求めている”ということです。

1:7より８つの幻が述べられます。それぞれの幻が旧約聖書のなかでの歴史を背後に於いて記述され、興味深いものではありますが、個別の理解は、今回は省略します。お渡ししました、紙のなかに数字を書いておきました。８つの幻とは「神の巡察使たち」、「四つの角と四人の職人」、「エルサレムの未来の栄光」、「大祭司の復職」、「燭台と尽きない油」、「空飛ぶのろい」、「エパ枡の中の罪悪」、「主の遠征隊」の8つです。一点、幻の構成について指摘しておきます。実はこれら８つの幻を比較すると、第一と第八、第二・第三が第六・第七と、第四と第五がそれぞれ類似性をもって配列されています。これは並行法と言い、文書作成の技巧の一つです。ゼカリヤ書には他に交差並行法と言われる技法もつかわれています。かなりねりあげられた文書といえるでしょう。この対応関係で、ひつだけ見てみます。第一の幻は1:8で「ひとりの人が赤い馬に乗っていた。その人は谷底にあるミルトスの木の間に立っていた。彼のうしろに、赤や、栗毛や、白い馬がいた」とありますが第八の幻は6:2-3で「第一の戦車は赤い馬が、第二の戦車は黒い馬が、/第三の戦車は白い馬が、第四の戦車はまだら毛の強い馬が引いていた」と言われています。赤い馬、白い馬が共通した幻です。

8つの幻の内一つだけ、我々新約の民にとっては重要な第三の幻だけは見ておきたいと思います。2:1-13即ち2章全体が「エルサレムの未来の栄光」と題された幻です。エルサレムの寿命は測定され、滅びの憂き目にあいます。しかし、8節で「主の栄光が、あなたがたを略奪した国々に私を遣わして後、万軍の主はこう仰せられる。『あなたがたに触れる者は、わたしのひとみに触れる者だ』」とまで言われています。エルサレムは主なる神の瞳に譬えられているのです。そして10-11節では「シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。－－主の御告げ－－ /その日、多くの国々が主につき、彼らはわたしの民となり、わたしはあなたのただ中に住む。あなたは、万軍の主が私をあなたに遣わされたことを知ろう」と言われています。シオンの娘というのはエルサレムの人々であり、ひいてはイスラエルの信仰者です。この表現は後ほど9:9にも出てきます。「シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫び」とあります。またユダ王国末期の預言者ゼパニヤ書にもでてきます。3:14です。「シオンの娘よ。喜び歌え。 イスラエルよ。喜び叫べ。 エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ」とあります。ゼパニヤ書の表現がゼカリヤ書で使用された、と考えるべきでしょう。10節と11節では主なる神が「あなたのただ中に住む」とまで言われています。2度繰り返されています。主なる神が共に居る、私の中に宿るから喜ぶのです。ゼファニア書の表現やゼカリヤ書9章の表現は「喜べ」に加え「喜び叫び」とか「喜び歌え」「喜び勝ち誇れ」という言葉も同時に使用されています。変な言い方かもしれませんがキチガイじみた喜びです。ここで思い出すのはピリピ人への手紙です。4:4で「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」とあります。これらをみるとヘブル語で「喜ぶ」に関連する語の勢揃い、といえます。「喜び叫ぶ」という意味の「ra:nan」、通常の「喜ぶ」という意味の「sa:maha」、やはり「喜ぶ」の意味で登場する「ga:yal」、通常は「叫ぶ」という意味の「ru:a:」です。主なる神にあっての喜びです。また13節で「主の前で静まれ」とあり、用意が整い、主なる神が顕現します。私たちにとっての主の顕現は主イエスの誕生、即ちクリスマスです。

第四の幻のところで「若枝」という表現が出てきますが、6:9-15節には再度「若枝」が出てきます。12-13節をお読みします。「彼にこう言え。『万軍の主はこう仰せられる。見よ。ひとりの人がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、主の神殿を建て直す』。彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』 」とあります。おそらくゼルバベル、ヨシュアに対応するふたりが幻として現れているのだと思われます。幻として現れた二人について語られているのであり、天的存在です。地上の人間ではありません。二人の幻の内一方は「若枝」ですから救い主メシアです。12節に「見よ。一人の人」という表現がでてきます。これは後にラテン語で「エケ・ホモ」即ち「見よこの人を」となった言葉です。「見よこの人を」はヨハネ福音書19:5でポンテオ・ピラトがユダヤ人に主イエスを引き渡す時に発した言葉です。新改訳聖書では「さあ、この人です」と訳されていますが口語訳では「見よ、この人だ」と訳されています。ギリシャ語原本を直訳すると「見よ、この人」でありヘブル語訳も「見よ、この人」です。ローマ・カソリックはゼカリヤ書のこの部分はイエス。キリストの預言としてきたため、「エケ・ホモ」という表現を大切にしてきたのです。エルサレムに「エケ・ホモ」教会というのがあります。由木先生の作られた歌詞で「まぶねのなかに」というクリスマスの讃美歌がありますが、その歌詞のなかで「この人を見よ」が繰り返されています。

　7章、8章は「新時代の曙光（あけぼの）」と言われ、エルサレムへの裁きと復興について描写している箇所です。心に留め置くべき言葉のみお読みします。7:9-11です。「万軍の主はこう仰せられる。「正しいさばきを行い、互いに誠実を尽くし、あわれみ合え。/やもめ、みなしご、在留異国人、貧しい者をしいたげるな。互いに心の中で悪をたくらむな。」/それなのに、彼らはこれを聞こうともせず、肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった」とあります。神の義の要約が述べられています。このまま主イエスの御言葉に繋がって行きます。

8:19には「真実と平和を愛せよ」という言葉が出てきます。神の国を最も短く表現するとなると、この表現が最適かもしれません。「真実と平和」です。

　9章からはそれまでと打って変わった表現形態になります。詩文です。通常1章から8章までを第一部、9章以降を第二部と読んでいます。また9章から11章までを第二ゼカリヤ書、12章以降を第三ゼカリア書と言っています。第二ゼカリア書は「王なるメシア」の描写が主たる内容です。

9-10節は当初お読みいただいた2箇所の内の後（あと）の部分です。9節はゼパニヤ書3:14-15とほぼ同じ表現です。シオンの娘、エルサレムの娘が両方出てくる節を探しますと、預言書以外で第二列王記19:21に在ります。「主が彼について語られたことばは次のとおりである。 処女であるシオンの娘は あなたをさげすみ、あなたをあざける。 エルサレムの娘は あなたのうしろで、頭を振る」とあります。これはアッシリア王セナケリブに告げられた主の言葉であり、その夜アッシリア軍は主の使いに大敗致します。これは預言者イザヤがヒゼキヤ王に示した預言です。シオンの娘は処女である結婚前の女性、エルサレムの娘は結婚後の若い女性を指しているようです。ヘブル語では町は女性形ですからこのような表現がされたのでしょう。そしてこの救いを齎す方は「柔和で、ろばに乗られる。それも雌ろばの子の子ろばに」と言われています。申命記17:16では「王は、---馬を多く増やしてはならない」と言われています。また第二サムエル記16:2でサムエルがエルサレムから逃れる時「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため」として提供されています。おそらく馬は戦闘行為を想起させるので平和の君としての王はろばに乗ってくる、と信じられていたのでしょう。「雌ろばの子の子ろば」とは掛け合わせでできたラバではなく純粋のろばである、という意味です。「柔和」という部分は「へりくだり」とも訳すことができます。10節では平和が一帯を覆うことが述べられています。エフライムはかつての北王国イスラエルを象徴して言う言葉です。この軍備否定即ち戦争放棄はイザヤ、ミカの伝統です。聖なる戦争即ち聖戦により純潔なヤハヴェ信仰集団としてのイスラエルを形成する神の試みは成功しませんでした。預言者はその原因はイスラエルの罪即ち偶像や自らの力に頼ろうとするところにあることを見抜き、真の主の民の共同体は戦いを全面的に止め、神の国は、贖いの主の来臨によってのみ成し遂げられることを宣言した、と言うべきでしょう。ミカ書4:3の一部をお読みします。「彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」とあります。要するに軍隊を持たない、ということです。

　9:11-11章の終わりまでは王なるメシアに関する各種の記述です。若干のことばの説明だけ致します。9:13の「ヤワン」とはギリシャ人のことです。ここでギリシャ人が攻めて来る、と言われていますが、アレクサンダー大王の予言と解釈されています。ゼカリアの時代でもいずれはギリシャも勢力が強くなる、ということが予想することは可能だったはずです。10:6に「ユダの家、ヨセフの家」と出てきますが「ヨセフの家」は嘗ての北王国のことです。即ち両者あわせて嘗てのイスラエルになります。7-8節で神の祝福が示されています。「エフライムは勇士のようになり、 その心はぶどう酒に酔ったように喜ぶ。 彼らの子らは見て喜び、 その心は主にあって大いに楽しむ。/わたしは彼らに合図して、彼らを集める。 わたしが彼らを贖ったからだ。 彼らは以前のように数がふえる」とあります。11章に入ると「バシャンの樫の木」と言う表現があります。バシャンはガリラヤ湖の北東の地域で豊かな実りを生む農業地帯です。11:7に二本の杖即ち「慈愛」と「結合」と名付けられた羊の群れができます。「慈愛」と訳されているのはヘブル語で「no:am」ですが本来は「喜び」「親切」という意味で口語訳では「恵み」と訳されています。こちらの訳の方が妥当かもしれません。結合、は「hohiru:m」で「ユニオン」の意味です。神の指導力によってもたらされる結合、即ち南北分裂王国の結合を象徴している、と考えられます。しかし、15節以降に登場する愚かな牧者によって救いの道が失われます。

　12章、13章は「主の日」についてです。第三ゼカリヤ書と呼ばれています。まず、エルサレム包囲による苦難があり、12:12節に典型的な嘆きの詩が歌われます。「ひとり嘆く」が定型的に繰り返されます。ナタンはダビデの子、シムイはレビの子です。13章に入っても「汚れの除去」についてや「打たれる牧者」の描写が続きます。8節、9節をみると2/3が断たれ、そして1/3が鍛えられる。そして主の名を呼ぶと主は答えられる、と言っています。最後に神とイスラエルの民の関係修復がなります。

　14章でやっと主に日の希望の面が描かれます。2節で大いなる困難があっても「残りの民」が町にいる、と言う。4節では主の足がオリーブ山の上に立つ、と言う。シオンの丘は敵の手に在るので神はオリーブの山に降り立ったのでしょう。「真中で二つに裂け」と言っていることから見ると地震の発生でしょう。5節によればユダの王ウジヤの時に地震があったようです。BC783-750がウジヤ別名アザリヤの治世ですからゼカリヤの250年前くらいの話です。そして主が来られます。「聖徒たち」も共に来ます。ここでの「聖徒」は天使のような者たちのことであり、天的な存在です。「聖徒」という言葉は文字通りには聖なる者、ということであり、そもそもは神様の呼称でした。旧約の時代に適用範囲が変化してゆき、神の使者、天使のような存在を指して使用されるようになりました。しかし、例外的にエリシャのような預言者を神の使者と同様な者としてこの言葉を適用することがありました。これがBC2cのマッカビーの反乱の頃には迫害の中、神殿祭儀を守ろうとする敬虔な人々も「聖徒」に加えられるようになりました。そして新約の時代には主の使徒を主（おも）に指す言葉となり、現代ではキリスト者全般を指して使う言葉にまで拡大使用されています。こう考えるとあまり気安く「聖徒」という言葉を使用することはできませんし、また使用する時は真（まこと）の信仰の心を持って使用すべきであろう、と思われます。黒人霊歌で「聖者の行進」と言う曲がありました。そもそもは葬儀の曲だったようです。10節ではこのエデンの園の回復のようなエルサレムについて描写が進みます。10節のゲバはエルサレムの北方、リモンはエルサレム南方の町で結局エルサレム一帯のことを指します。アラバは「平地」の意味でエルサレムは丘ですのでそれに対し生活しやすい平地を描いたのでしょう。ベニヤミンの門などはエルサレムの地名です。ハナヌエルのやぐらとか隅の門というのはエレミヤ書31:38にもでてきます。11節の「絶滅」の言葉は注意に値します。これは「he:rem」という名詞ですがそもそもは「ha:ram」という「聖絶する」という意味の動詞です。これはヨシュア記等にでてくる、神の名に置いて絶滅させる、乃至は殺して神に奉納する、と言う意味の言葉です。この14:11でエルサレムではこの聖絶はもはや起きない、と言われています。エルサレムという名は「平和の町」の意味ですから、人々が「安らかに住む」ようになる、というのです。12-15節でエルサレムに攻め上るすべての国々が災害に見舞われます。互いに滅ぼしあいます。

　そして遂にエルサレムの完全回復がなされます。16節に「仮庵の祭り」があります。太陽暦では9月末から10月半ばにかけて行われる秋の収穫祭です。仮庵の祭りと言われるのは出エジプトの40年の旅で仮庵に住んだことを思い起こさせるためです。17-19節で仮庵の祭りに参加しない民族には神の罰が下される、と言われています。エジプトはその代表格です。この部分はプトレマイオス朝エジプトが復興してから書かれたのかもしれません。もしそうだとすればBC4-3cのことです。20節に「主への聖なるもの」という表現がでてきます。この言葉は出エジプト記28:36と48:14にでてきます。主なる神に捧げられた特別なもの、ということの徴（しるし）です。そして21節では主の宮の中のなべがこの「主への聖なるもの」になる、といわれています。なべは日常用具であり俗なるものの典型ですがここでは「主への聖なるもの」とされています。新しいイスラエルの下では世俗の区別は意味を持たず、すべてが聖なるものとして扱われる、という事でしょう。この世の職業を神からの召命と理解するプロテスタント信仰もこれに通ずるところがあるかもしれません。とにもかくにも「主への聖なるもの」とされたなべで、食物を煮るようになる、といわれています。最後の「万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる」というのは面白い表現です。文字通りには「カナン人」という表現です。イザヤ書23:8でカナン人と商人を同一視して、その商人を強く批判しています。カナン人は努力も払わず、かすめ取って豊かになった姑息な商人だ、という訳です。ゼカリヤ書14:21ではもはやそのような者どもはいない、と宣言しています。思い出されるのは主イエスの宮清めです。いつも“なぜイエス様はこのようなひどい事をされたのか”と気になっていましたが、カナン人の土着信仰、日本で言えば「おふだ」、のようなものを扱っていた宮の商人達に、イスラエル信仰の純潔さを知らしめる必要があったのかもしれません。ホセア書12:7に「商人は手に欺きのはかりを持ち、しいたげることを好む」とあるように、カナン商人は、決して良くは思われていなかったようです。

　十二小預言書には裁きの面が強く出ていて、心が圧迫されるものが多かったのですが、ゼカリヤ書は裁きと祝福が混在しており、両者が織りなされて登場するような感触があります。難解な文書ではありますが、ダニエル書、黙示録など他の文書と比較しながら想像力を働かせればより深い理解に到達できるでしょう。しかし、注意しなければならないのは現代の社会への粗雑な適用でオカルト的な道に入り込むのを避けるべきです。救いの希望というイスラエル信仰の深いところでの連続性を見るように致しましょう。祈ります。

（ご在天の主なる御神様、この礼拝の時を感謝致します。ゼカリヤの壮大な救いの幻が神の子の贖罪の犠牲による救いへと至る、イスラエルの救済史のなかに私たちを置いて下さりありがとうございます。単なる字句上での預言の成就との理解ではなく、イスラエルの歴史の底流に流れる主なる神の救済の業としてのイエス・キリストを仰ぐ信仰をお与えください。私たちがその僕として謙虚にしかし勇気をもってこの世の営みに向かうことができるよう、知恵と力と勇気をお与えください。我らの救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）